

或君の曰く、余が家を繼ぎて、領分のうち在々を巡見の時、金方村とかやいふ處の片隱に、うつくり水湧き出づる井あり、余こゝに立ちよりて、その水を掬し見るに、其清き事いふ計なし、時に傍に六十餘の老婆うづくまりありけるを召して、此水は至りて清淨水なり、里には此水を遣ふにやと尋ねたりければ、老婆の曰く、凡此あたりの民家二百軒許皆此水を遣ひ候、それにつき物語の候、此村元來水あしき所にて、一向に用ひられず、我父ふかく是を歎き、壯年の時より大願心をはつし、薬師如來へ立願して、かなたこなたに井戸を堀りたる事、八十ヶ所に及ぶといへども、更によき水を求め得ず、最早勢力も勞れ、老年に及びて、漸く此所の井を堀りて、終に其翌日果て申し候其故に此井をば、五左衛門井戸と唱へて、今に親の名を唱へ來り候、是も最旱四十年許にて候が、夫よりして一村うぢより、此姥に扶持を呉れ候ひて、此井の主になり、いと安樂に暮し申し候も、父のかげにて候、今日は殿様御通と承り候ゆゑ、井戸守の事に候へば、此所に罷り出て候と申したり、余この話をきいて、大に感心し、當座の褒美をつかはし、且近習の面々へ向ひ、申しかせしは、皆只今の物語を聞きしか、かれが親、一村の自由を達せんとて、辛苦萬勞して、八十餘の井を堀りて、終によき水を堀りて、其翌日果てたりとかや、人君たるもの、かれが精心の半を以てせば、賢君名侯と稱すべし、かれは一村の助にせんとて、命を捨て、井を堀り、一國一家の主、此心を以て、家中始め、町在の者、末々まで、永久の爲を思は、などか清水の井を堀りてざらん、皆眞實に思ふ心なくして、只おのれが爲のみにして、人の事を思ひはからず、彼親仁既に命終るといへども、今に其名を井に呼び、老婆を扶持し、一村の者ども、此水のあらん限り、五左衛門が所業の添き事を思ひ、いつ迄もかれが功の廣大にて、深厚なる事をいひ出だすべし、名は末代まで傳はり、人は一代にて朽つることわり、我人しらぬはあらねど、行ふもの少し、五左衛門井戸の事をめい／＼身に引きあて、心得べしと仰せられき。